バトン・ルージュのサラ・モーガン
―『南部同盟の娘の日記』から―

中村紘一

(1)

同じルイジアナ州出身の南部娘でありながら、サラ・モーガン（ドーソン）Sarah Morgan (Dawson) (1842-1909) には、ケイト・ストウン Kate Stone (1841-1907) とは違った社会的背景があった。それはケイト・ストウンがルイジアナ州中東部の田園地帯にあった「ブロウクンバーン」と名付けられた棉大農園（コトン・プランテーション）の娘であるのに対し、サラ・モーガンは、同州の州都バトン・ルージュの市民であったことである。ケイト・ストウンが南部に典型的な田園派だとすれば、サラ・モーガンはやや例外的な都会派だったということになる。かりに南北戦争の一つの原因を北部の近代産業対南部の奴隷制大農園という社会・経済的対立とみなすならば、バトン・ルージュに住んでいたモーガン家はその対立の枠から外れていたと言えよう。

彼女の父トマス・ギブズ・モーガンはペンシルヴェニア州出身で、ニュー・オーリンズ港の徴税官を勤め、その後、一八五〇年からはバトン・ルージュで州都の治安判事の地位にあった。この父は南部の主張する諸権利に

は完全に共鳴するものの、だからと言って連邦脱退に賛成することはもともとなかった。しかし、ルイジアナ州がいったん脱退を決めると、州と行動を共にした。長兄のフィリップ・ヒッキイ・モーガンもまたニュー・オーリンズ地区の判事で、やはり連邦脱退には反対だったが、父とは違って最後まで連邦を支持した。もっとも、自分の弟たちや友人たちに対して武器を取ることは拒否している。長姉のラヴィニアも北軍側についたが、これは夫のドラムが北軍の少佐であったためで、この少佐は今度は妻の兄弟たちに対して武器を取るのを免れるべく、カリフォルニアに駐在し同州の連邦脱退を阻止する仕事に従事していた。（もう一人の兄ハリーはつまらぬ争いで決闘を挑み、亡くなっていた。）他の三人の兄弟たちトマス、ジョージ、ジェイムズはみな志願して南軍側についた。家に残された母を含め（父は戦争が始まると同時に亡くなっている）、既婚のリリー、未婚のミリアムの姉妹も当然のことながら南部同盟支持であった。

このような家族構成の中にあったサラ・モーガンもやはり一応南軍側についた。彼女は南北戦争が始まった翌年の一八六二年三月（彼女二〇歳の時）から日記を書き始めているが、同年五月には今度の戦争における自分の立場を明確にしようと努めている。

私が脱退論支持者であったことは一度もなかった。というのは政治問題についてはおせっかいを焼かずに父の意見を黙って採用したからである。しかし、その父でさえも自分の州と行動を共にし、北部の狂信的な指導者たちが非常に多くの残虐行為を犯した時には、連邦に未練を持ったけれども、「われわれの自由のために死ぬまで戦う」と言った。私も同じことを言う。あれほど多くの人たちがそのために死んだ大義を勝ちとるまで戦いたい。私は脱退論を信じるのではなく、自由を信じるのである。私は、南部が勝ち、自らの権限を発揮して、連邦に復帰して欲しいと思う。というのも、バラバラになった状態では、間違いなく破滅が両者を待ち受けていると信じるからである。脱退の理論に基づくこの南部同盟は砂で縄をなうようなもので頼りにならぬことおびただしく、長続きすまい――五年ももたないであろう。北部も私たちを制圧することは

できない。自由でありたいという私たちの決意は固いからである。彼らには、自分たちの引き起こした負債を支払うために私たちの財産を没収するといった権利はない。そのような状況では連邦の死というよりも国の死を招くことになるだけである。（一八六二年五月一四日）[1]

自分たちの愛する南部の自由のために、北軍の侵略に対しては徹底的に戦うべきであるという彼女の決意は固い。しかし、その一方で、彼女は決して頑迷な南部同盟支持者ではなく、連邦脱退には反対の立場であったことがやはりここでは注目される。すなわち、彼女には、南北といった地域にとらわれない、それを超えた国全体を見渡す視野も具わっていたのである。彼女のこの一見相矛盾するような立場から生まれ出る（そしてムシのよいとも言える）願望は「私は南部が勝ち、自らの権限を発揮して、連邦に復帰して欲しい」という言葉に端的に現れているように思われる。

(2)

サラ・モーガンのこの複雑な立場は、次のようなより具体的な事実の記述からも窺われる。

私は、バトン・ルージュでは自分たちの家族が考えていたよりもはるかに重要であると信じ始めている。私たちを訪問できないと心得ているある種の人たちが、私の家族みんなについて述べていることを耳にすると笑止千万である。…父が生きている頃は、彼らは「誇り高きモーガン家」とか「バトン・ルージュの貴族」と呼ぶ以上に声高に私たちのことをあえて口にすることはなかった。…しかし、父が死んだ今、その人々は私たちのことを心ゆくまで批判し、中傷し、悪口の言える共有財産のように思っている。…（同日）

モーガン家は（特に父の存命中は）、一般市民の反発を招くほどに気位の高い南部人であったことがここではよ

く判る。日記は続けて、北軍がバトン・ルージュを占領した時のこのようなモーガン家の対応の仕方とそれに対する市民の反応を詳述する。

さて、人々は自分のばかばかしい振舞がうまく行かなくなると、今度はありそうにもないことを試みる。そんなわけで、昨日は町中が大騒ぎになった。なぜなら北軍の将校たちがモーガン家の娘たちを訪問したと伝えられ、紳士方はみな、彼らがどのように接待されたかを知りたがったからである。一人はゆかしくも次のようにおっしゃった。「彼らが訪問したとしたら、町中で最良の教訓をそこで得たことになる。つまり、あの若いレディたちは真の南部精神で彼らに接するであろうと。」他の人たちは何も知らされてないが、きっと知りたいことであろう。

察するに、この話は私たちがここにいる北軍の将校たちのことを下衆呼ばわり――そうまさしく下衆呼ばわり――することを嫌がったことから、また、多くの友人たちといっしょになって彼らのことを嘘つき、泥棒、殺人者、ならず者、人間のくず(等々)呼ばわりをすまいとしたことから生まれたのであろう。そんなふうなことを口にするのはレディに相応しくないし、また私たちの大義を損いこそすれそれを推進させるものでない。彼女らがどうであれ、そのために私がレディでなくなるようなことはすまい。そのような悪態は低級な新聞の戦争記事以外に相応しくなく私はそんなものに加わらない。(同日)

サラ・モーガンには、南部のレディとしての気位、つまり、人間としての品位が具わっていて、それが敵の将校たちに対して他の婦人たちと同じような態度をとらせないというわけである。が、それに加えて、彼女には、もう一つ他の人たちにはない特殊事情があった。彼女は続けて書いている。

私には、北軍に属してはいるが誰にも劣らず愛し尊敬する義兄がいる。その義兄に、北部人であることから、私のポケットのものを盗もうとする抑え難い欲求が生まれ、真実を告げるすべての力が奪われてしまうなどということには私は容易に同意しない。そうなの！〔義兄である〕ドラム少佐以上に私が賞讃する人は数少ないし、自分が正しいと信じることをなす独立精神に対して私は彼を尊敬している。わが国において言論と行動の自由を持つことは結構であるが、下品な悪口や誹謗はご免だ。ついこの間までわれらの同胞と呼んでいた人々が、考慮にも値せず、嘘つきで、臆病で、裏切り者だなんて認められようか？　私にはできない！　もし彼らが私たちを征服したならば、私は彼らが優れた人種だと認めよう。私たちが

臆病者に征服されたなどと言いたくない。というのも、そんなことをしたら私たちの立場はなくなるだろう。私たちに勝利する者は勇敢な人々であってほしい。その点では北部人は間違いなく勇敢である。劣った敵など迎えたくない。私は同等の人間のみと戦う。あの婦人たちなら自分の兄弟が戦っている戦闘で臆病者が勝利したと認めるかもしれないが、私は自分の兄弟は勇敢な男たちと戦って勝利したと言いたい。どちらが最も名誉なことか？（同日）

サラ・モーガンが他の南部婦人のように北軍兵の悪態をつくことのできないのは、義兄が北軍に属しているという特殊事情もさることながら、彼女自身、臆病者を敵に廻したくないとする自尊心の持主であったがためである。この自尊心（そして、義兄を愛するが）ゆえに、南軍の勝利を間違いなく願望しても北軍（北部人）を誹謗することなどはとてもできないのである。

(3)

南部人の自尊心は、サラ・モーガンにおいてはこのように優れた徳として具わっていたのであるが、それがいつでも誰にとってもそうであったというわけではない。

先に少し触れた兄のハリーの死は誤った自尊心に起因する空しい出来事であったと言えよう。その出来事の発端はこうである。ある近隣の家で宴会があって誰かが歌を唱った。

年輩のスパーク氏が立ち上って席を離れたので、ハル〔ハリー〕は「ご迷惑じゃなかったでしょうね」とたずねた。いや、疲れたので家に帰るだけだと彼は答えた。彼がいなくなると、阿片を飲んでいたと噂のある――ハルはそんなことはないといつも言っていたが――彼の息子が自分の哀れな父親に迷惑をかけるとはひどいことだと言った。ハルは「あなたも聞いていた通り、私たちは迷惑をかけはしなかった」と答えた。「おまえは嘘つきだ！」と相手は叫んだ。それは私たちの家族の

誰一人として容認するに値しない、また我慢することのできない呼び名であった。あっという間にハルは立ち上ると持っていた散歩用の杖で相手の顔を殴った。その一撃で杖のバネがゆるんで下の部分がヴェランダを越えて通りにまで跳んで行った。刀のついた上の部分――というのもそれは父の仕込み杖だったから――は彼の手に残った。私はその仕込み杖がバラバラになることを彼があらかじめ知っていたとは思わない。確かなことは相手が哀れな声で素手の者につけこんでいると言った時始めて彼がそれに気づいたことである。ハリーは相手を罵倒すると、杖の本体といっしょにそれを投げ捨てて、「さあ、これで対等だ」と言った、これに対する相手の返事はボーイーナイフを抜いて、まさしくハリーに突き刺そうとしていたことである。ハリーの方は身を退けるのを潔しとしなかった。やっとのことでヘンダソン氏がスパーク氏に飛びかかり彼を引き離した。(一八六二年四月一九日)

結局、この決闘の傷がもとでハリーは死ぬ。エドマンド・ウィルソンによれば、この南部に特徴的な決闘とは「オムステッド(フレデリック・ロー・オムステッド 一八二二―一九〇三、米国の景観建築家、ここでは彼の『棉王国』(二巻一八六一)に言及されていること)が奴隷所有に起因する自己制御の欠如の現れと述べている名誉にかかわる奇妙な出来事である。このように見境いなく激情してしまうこと、すぐに決闘を申し込むことはサウス・カロライナ州が連邦から脱退し、サムター要塞に発砲した行動において非常に重要な要因だったことは明らかである[2]」と説明しているものである。すでに述べたように、モーガン家は決して奴隷制大農園を経営する一家ではなかったけれども、ここでは、そのモーガン家の者でさえも名誉や自尊心から来る決闘という南部特有の風習や気質にとっぷりと染まっていたことが判る。もっとも、ハリーの場合には、妹のサラの場合とに違って、南部の名誉や自尊心の現れが裏目に出たと考えることもできよう。

(4)

ただここで一言言い添えるならば、モーガン家は確かに奴隷制大農園の一家でなかったけれど、黒人奴隷とは

必ずしも無縁でなく、彼らの家にも黒人メイドはいたのである。彼女は名を（カ）ティシュといい、バトン・ルージュからの疎開ではサラたちのお伴をする。この疎開には、モーガン家だけでなく、他の家の人たちも加わるが、その時の黒人メイドたちの行動を見て、サラは次のように書いている。「黒人たちはその行動について最大級の賞讃を受けるに値する。何百人もが赤ん坊や包を抱いて歩いていた。何を運び出せることができたかとたずねると決まって、『奥様の衣服、銀食器、赤ん坊』という返事だった。自分のものは運び出せたかとたずねると『とんでもねえ、奥様のものが持ち出せるだけで嬉しかったです。自分のものを考える余裕はなかったです』ということであった」（一八六二年五月三一日）。

一般的に言って、サラ・モーガンの日記では黒人奴隷に関する言及は、例えばメアリ・チェスナット Mary Chesnut (1823-1886) やケイト・ストウンのそれと較べると、極めて少ない。たとい言及されていても、右の例に見られるように、ただ柔順なメイドの姿としての奴隷について述べたものにすぎない。実際、サラ・モーガンはこのような黒人の召使いたちにバイブル・クラスを開くようなことがあっても、メアリ・チェスナットのように黒人奴隷の反乱に遭遇するといった危機にさらされることはなかった。つまり、彼女には、黒人奴隷と直接的に緊張関係を経験するようなことはなかったから、したがって奴隷問題についての意識は薄かったと言える。にもかかわらず、もし先ほどのオムステッドの説が正しいとするならば（十分に興味ある考察のように思われるのだが）、ハリーを決闘で失うということによって、間接的であるにせよ、また、必ずしも意識に上らない形であるにせよ、彼女もやはり南部の奴隷制の問題に無縁であるわけにはいかなかったと言えよう。

(5)

都会派であったがゆえに、サラ・モーガンは奴隷問題について言及することは比較的少なかったのであるが、その代りに、占領下の都市に生きた娘としての経験はたっぷりと述べている。とりわけそこで見聞した、戦争がもたらす悲惨さ、野蛮さについての彼女の記述は生々しい。一八六二年五月バトン・ルージュは北軍の占領下に入る。それから二カ月余りたった時の日記である。

この町は、今一万人の兵士たちがいるが、かつて七千人の市民の人口だった時よりも静かである。この途方もない増加にもかかわらず、時々その静けさは墓場のようである。哀れな兵士たちはひどい状態で死んで行く。昨日は一三人が死んだ。日曜日には船が何百人という病人を波止場に降ろした。何人かは暑い太陽の下で昼からずっとそこに横たわって、馬車が自分たちを病院へ運んでくれるのを待っていた。その仕事に夕方中かかった。その間、この哀れな人たちはさまざまな病状をかかえて、裸のまま地面に横たわっていた。いとこのウィルは、そのうちの一人が死ぬ時そばに誰も見取る者もいないままに横たわっているのを見た。別の者も死にかけて何やらぶつぶつ言っていたが、自分の眼や口から蝿を追い払う体力もなく、また代りにそれをやってくれる人もいなかった。いとこのウィルが手伝ってはやったが。もう一人の人は、骨と皮だけで、同じように死の苦しみの中にあった。が、彼には明らかに親切な友がいた。というのも、何人かが集まって彼を支え、扇いでやっており、彼の息子が覆いかぶさるようにして大声で泣いていたからである。哀れな少年の泣き声を聞くのは悲しいことだったとティシュは言っている。私たちの向かいに住むバウムシュタークは、何人かの助手を雇って一日中金槌を打っている。日曜日にも一日中棺を作ったが、それでも間に会わないと言う。……ここでは葬儀屋は決して彼だけではないことを考えてみよ！　ああ、この哀れな人たちが自分の故国で無事におれたらどんなによかったことか！　彼らが誰からも神の加護がありますようにと言ってももらえず、ここで犬のように死んで行くのを見ていると胸も張り裂けんばかりである。しばらく前のことであるが、カトリックの司祭が誰かに会いに行って、ベッドに横たわっている者の傍に近寄って何か親切な言葉をかけてやると、その男は泣き崩れて叫んだ。「有難いことで、死ぬ前に一言やさしい言葉が聞けました。」二、三分後、その哀れな男は死んだ。（一八六二年七月二日）

一八六二年八月五日、南軍はバトン・ルージュ奪回を目指して反撃に出る。バトン・ルージュがいよいよ砲火に包まれることを知った市民たちは近隣の地方に疎開を始めた。サラ・モーガンも母や姉妹たちと二〇マイル離れたリンウッドに逃がれる。しかし、彼女はバトン・ルージュの自分たちの家の様子が気になって仕方がない。八月二五日、妹のミリアムがその様子を見て来て報告する。

家に入った途端その荒廃ぶりにわっと泣き出したと彼女〔ミリアム〕は言う。それはいたるところ破壊の現場であった。書斎は空っぽ、陶器は壊され、食器棚は斧で引き裂かれ、杉材の三つのたんすは割られて、中味が盗まれ、逆さに積まれていた。客間の飾り物はみな――ハルが非常に大切にしていた石膏製のアポロとダイアナ像さえも――持ち去られていた。彼女のピアノは、客間の真中まで引きずって行ったが、重すぎて置き去りにされていた。彼女の机は、手紙やノートを親指の型をつけてまき散らした状態で開けたままにされ、彼女宛のウィルの最後の手紙も開けられて床に捨てられており、ヤンキーの汚い指型がついていた。額縁から半分切り取られた母の肖像画が床にころがっていた。略奪の場にいたマーガレットはどのようにして父の肖像画を救ったかを語った。私たちの家で破壊を行なったのはすべて将校たちだったようである。一人がソファに跳び上って肖像画を切り落とそうとした時（ミリアムはその泥だらけの足跡を見つけた）、マーガレットは叫んだ。「紳士のみなさん、後生ですから、そのままにして置いて下さい！　ここにあるものは何でも持って行って下さい。でも、その方は亡くなったのです。お嬢さんたちには、それをなくすくらいなら家が燃えるのを見る方がましなのです！」「おまえのいまいましい脳みそを吹き飛ばしてやろう」というのが、彼女の頭にピストルをつきつけた「紳士」の返事だった。仲間の将校があわててそのピストルを払いのけたので、彼らは肖像画はそのままにして、もっと面白い遊びに興じた。他の全てのものもずたずたに切り裂かれていた。

(6)

彼女の日記にはこのような調子で、次には二階の母の寝室や自分たちの部屋についてというふうにその破壊ぶりが数ページにわたって詳述される。「私たちの家は町中で一番ひどい扱いを受けた。私たちはどちらに対して

も悪態をつくことをしなかったから、両軍から等しく恐れられるという不運に見舞われた。北軍兵たちは哀れな三人の女性が隠れ住む町中で唯一の家を自分たちの怨みを晴らすために選んだのだ」（一八六二年八月二五日）。三日後にはサラ自身、今度は自分の眼で確かめようと、バトン・ルージュに出かけ、その後、またその惨状を綿綿と書き綴る。「もしこれを読む人があったら、私には自分の家の破壊のこと以外に書くことがないのかと思うであろう。しかし、私はそれをみんなここに書きつける。それをもっと痛切に感じないなら、自分は木偶の坊に違いないと思う。」

ところで、このように日記に家の破壊のことを詳述する理由を彼女は「すべての女性が熱望するもの――つまり、最悪の事態を知って満足するがゆえである。…それが幸・不幸、どちらであれ、確かなものが自分には安らぎとなるのである。被害を受けた他の人たちには心から気の毒に思うが、私たちの場合同情が必要だと自分には思えない」と書いている。つまり、サラ・モーガンにとって、家の惨状を詳述することは、決して同情を得るためでなく、むしろ（最悪のものであっても）確かなことを知りたい、あるいは、どうかすると自分の好奇心を満足させたいという気持からであった、とも言えそうなのである。

南軍のバトン・ルージュ奪回作戦が始まって間もない頃、サラ・モーガンたちは疎開先から「気晴らしをしようと決心して」、ミシシッピ川に碇泊している北軍の軍艦見物のために馬を駆って出かける。これは、川沿いを行くことになるために、いつ軍艦から発砲を受けるとも限らない危険があった。母や他の人たちが思い止まらせようとするにも構わず彼女たちは出かけたのである。案の定、軍艦からはロケット爆弾が飛び交ったがこの時は何とか事なきを得た。しかし、一一月、今度はポート・ハドソン（ルイジアナ州南東部、バトン・ルージュの北方にあるミシシッピ川畔の村、戦跡一八六三）に駐在の南軍に弟の（トーマス）ギブスを訪問する。その帰り道、あるキャンプを通りかかった途端、発砲があり、驚い

た馬は馬車からサラ・モーガンを振り落とし、彼女の背骨を鋼の車輪に強打させてしまった。重傷を負った彼女は六カ月もベッドを離れることができず、また生涯に渡ってその後遺症に悩まされることになる。これは彼女にとってまことに気の毒な不慮の事故であったが、しかし、先の軍艦見物の危険といい、今回の事故といい、元を質せばどうやら彼女の旺盛な好奇心のせいとも考えられなくはない。

このような好奇心の持主である彼女の教育は他の兄弟や姉妹たちと同様、主として両親によって家庭で行われた。正規の学校教育を受けたのは十カ月くらいであったというが、彼女は十分豊かな教養を具えていたらしく、そのことは日記の中で垣間見ることができるフランス語や歴史や古典文学に対する造詣の深さが証明している。

日記を付け始めた二〇歳の頃の彼女は非常に背が高く（五フィート七インチ）、澄んだ青い眼とかすかに赤味がかった金髪の持主であった。雪のように白い肌は砂時計のようにくびれた身体つきによく似合った。また日記にも述べられているように、サラ・モーガンは非常に美しいソプラノの声の持主でもあり、バトン・ルージュを占領した南軍北軍両方の兵の賞讃の的であったと言う。

以上は、インディアナ大学版サラ・モーガンの『日記』の編集者ジェイムズ・I・ロバートソン・ジュニアが伝える彼女の肖像であるが、彼はさらに付け加えて「彼女がどこに住もうと、その敷居を跨いだ求婚者たちの数から考えて彼女が光り輝く個性を持っていたことは――もっとも日記にはそれぞれの訪問者に関しては強い持ち前の感情をはっきりと表わしているが――明らかである」[8]と述べている。

(7)

都会派であったサラ・モーガンは、ウィリアム・スタイロンが軽蔑するいわゆる南部の「大農園婦人（プランテーション・ミストレス）」――か弱く、他人に依存的で、愚鈍である――でなかったことはもちろんのことであるが、さりとて占領下にあったバトン・ルージュやニュー・オーリンズといった都会の同性たちの意見や行動に必ずしも歩調を合わせていたわけでない。そのことを彼女は繰り返し述べている。

……もし私たちの兵士の勇気や騎士精神が私たちの国〔南部同盟〕を救えないのなら、この国は、この「レディたち」の何人かが見せているような口汚い弁舌や行動によって自由を得るよりも勇敢な人種によって征服される方がいいと私は言いたい。もしその時今のように婦人たちが優越的な態度をとるなら、私はそのような言葉遣いの人たちが支配する国には住みたくない。合衆国軍のボタンをつけているからというただそれだけの理由でその紳士の顔に唾を吐くことのできる女性を私は自分に相応しい友と見なせようか？　ビドル中尉はニュー・オーリンズの通りを歩けば必ずレディたちがひどい侮辱を与えたと私に証言した。また彼の友人は相手の顔を見ないで静かに歩いていたのに一人のレディから顔に唾を吐きかけられたのである。（彼女は彼の気を引くためにそんなことをしたのではないかとさえ思えてくる）……こんなことは誰にとってもうんざりだ。「騒々しい」婦人たちよ、私はあなた方を軽蔑してやまない！　あなた方の下品さを何と蔑むことか！（一八六二年六月一六日）

サラ・モーガンは、このようにして同性の下品さを批判して、決してその仲間に加わることはないが、だからと言って、それで善しとしてそのまま超然としているわけでない。同じ女性として自己反省をこめて、事態の原因を考えてみる。

ああ、女性たち！　あなた方は自らの聖なる使命を何と嫌悪すべき暴力へと貶めてしまったことか！　神は私たちの無慈

悲な心を罰せられるだろう。一丁も離れていないところにある新劇場では一〇〇人以上の病んだ兵士たちが横たわっている。ところが、手を差し延べて一杯の冷い水を与え、彼らを救った女性がいるだろうか？　国や信条の違いにもかかわらず、インディアンにも異教徒にも差別することなく援助を施したという慈善心はどこへ行ったのか？　無くなってしまった！　連邦対脱退の対立の中ですべてが無くなってしまったのである！　それこそこのアメリカ人の戦争が私たちにもたらしたものなのだ。……私は女の馬鹿話を止して、女の義務を果たしたい。見放された兵士の傍にいて、その兵士が臨終の眼を閉じようとしている時神の加護がありますようにと祈ってあげたい。それが女性の使命であって、説教したり政争に巻きこまれたりすることではない。……哀れな兵士たちよ、あなた方は眼を閉じてくれる女性の手もなしに死んで行くがよい！　私たち女性は、愛国的になりすぎてあなた方を助けることができないのである。（同日）

彼女によれば、本来女性には、優れた特性として「慈善心」が具わっており、それは敵味方を超えて発揮され、またそうすることが女性の義務であり使命であったという。ところが、この優れた特性が女性から失われることになったのは、すべて戦争のせいである、言い換えれば、女性が「愛国的になりすぎ」たせいだと、彼女は考える。同じようにして、占領軍兵に対して悪口雑言や唾を吐きかけて品位を落としてしまったバトン・ルージュやニュー・オーリンズのレディたちも「愛国的になりすぎ」ているのであって、ということは結局、彼女たちも戦争の犠牲者に他ならなかったということに彼女にはなるはずである。

(8)

一八六三年四月、これまで疎開を続けていたサラ・モーガンたちはもはやバトン・ルージュに戻ることのできないのを知り、長兄のフィリップ・モーガン（連邦支持者）を頼って北軍の占領下にあるニュー・オーリンズに向かうことにする。しかし、ニュー・オーリンズに入るためには連邦（北軍）に対する忠誠の誓いを立てなけれ

ばならない。ここで、彼女も彼女の母も当然のこととは言え、やはり自分自身が「愛国的」であることを意識せざるをえない。彼女も母も誓いをするにはしたが、それは苦渋に満ちた心ならずもの選択であった。彼女はその時の様子を次のように書いている。

……彼〔北軍の将校〕はもう一度沈黙の後、自分の帽子を脱いで、私たちに右手を挙げるように命じた。半ば泣きながら、私は手で顔を覆い、南部同盟とその兵士のために一心不乱に祈った。そのために彼の言っていることは聞こえずやっとのことで「神かけて誓いますか?」という質問が耳に入るだけであった。私は身震いし、さらに一生懸命祈った。それからまた、唇一つ動かない恐しい沈黙があった。めいめいがまるで悪夢の中にいるように感じ、やっとのことで将校は白紙帳簿を投げ捨てると「結構です」と告げた。奇妙なことには、私は何の変化も経験しなかった。私は兵と私たちの国のためにこのうえなく一生懸命に祈った。だから、北部人(ヤンキー)に変わる過程を告げたに違いないむかつくような、不愉快な感情を味うことはなかった。(一八六三年四月二二日)

ここでのサラ・モーガンは十分愛国的である。いや、もう一歩のところで「愛国的になりすぎ」ようとしている。しかし、次のような日記を読む時、彼女の精神のバランスは決して極端に傾くことがなさそうにも思われてくる。

今朝、七時に朝食に降りて行くと、兄はリンカーンとシューアード国務長官の暗殺の知らせを読んで聞かせた。

「主いひ給ふ、復讐するは我にあり、我これを報いん」(新ロマ書一二章一九)。これは殺人だ! それを犯した人たちに神の赦しがあらんことを!

……

シャルロット・コルディ(一七六八―九三 処刑される)は入浴中のマラー(一七四三―九三 フランス革命の指導者)を刺殺したために、自由のための殉教者の一人、フランスの女英雄の一人、として歴史上持ち上げられている、私にとっては、それは全くの殺人である、歴史家たちには流血を称揚させるがよい。それを憎悪するのは女性の立場である。もし誰かがジェフ・デイヴィス(一八〇八―八九 南部同盟大統領)を殺

したならその人は賛美されるに違いないことが判っているから、私は今度の事件を憎悪し、間違った殺人であり、私たちの大義に値しないと言うのである。――これはこの犯罪を犯した暴漢の一時的な狂信にすぎなかったと神がお認めになるように！　彼の血が私たちの国に報いてくることのないように！（一八六五年四月一九日）

ちなみにここで、冒頭に言及した同じルイジアナ州出身の南部娘ケイト・ストウンがこのリンカーン暗殺事件についてどのような感想を記していたかを思い起こしておきたい。「暴君〔リンカーン〕を排除し何世代にも渡って有名人となるJ・ウィルクス・ブースに栄光あれ。サラットも南部人すべての愛と喝采を勝ち得たのだが、彼は大胆にもシューアードを攻撃し、その命を風前の灯にさせたのだ。我らの二人の復讐者が南部に逃げて来て暖い歓迎を受けることを心から願う。…私は〔暗殺された〕二人の運命を気の毒に思うことはできない。二人はその運命に値し、当然の報いを受けたのである」[4]とケイト・ストウンは書いている。何と大きな相違であろうか！　この相違は同じ二〇歳過ぎの娘でありながら、二人のメンタリティ、教育、環境などの違いから生じて来たものであろうが、中でもやはり、ケイト・ストウンが「ブロウクンバーン」棉大農園の娘であったのに対してサラ・モーガンは南部では例外的な都会派のレディであったことが大きな要因であったと思われる。もちろん、ケイト・ストウンとて、単なる「大農園婦人（プランテーション・ミストレス）」では決してなく、楽天的でかつ自立心を持った女性であったけれども、それでもやはり良かれ悪しかれさまざまな点で南部というものが大きく意味する棉大農園の娘であったために「愛国的になりすぎ」ることから免れられなかったと言えよう。一方、サラ・モーガンはたとい都会派であっても、あるいは、家族の中に連邦支持者がいても、南部に対して十分愛国的ではあるが、しかし、それと同時にまたそのような理由ゆえに「愛国的になりすぎ」ることはなかった（できなかった）のではあるまいか。

一八六二年八月二一日、疎開先にあったサラ・モーガンは昨晩見た夢のことを記している。「自分が連邦側〔北

軍〕将校と結婚しようとしている夢を見た！　その夢は、そうするかどうかという質問に対して、『その人を愛しているなら、もちろん！』と強調して返事をした結果だった。このような返事をすればおそらくこの郡での愛国者としての自分の名声は台無しになるだろう。ふん！　私は一刻者なんかであるものか！――それに馬鹿でもない……。」ここでの記述には、彼女の真面目がいかんなく発揮されている。

彼女自身が「愛国者（愛国的）」という言葉を口にする時には、どうやらそれは、偏狭な精神の現れであり、下品な言動につながるものであり、世間体ばかりを気にする浅薄なものといった否定的な意味として遣われているように思われる。したがって、彼女はそういうものには捕われまいとするのは当然のことであるが、しかし、彼女が、自分の心情から発する兄弟愛や同胞愛を（彼女自身はそれを愛国的とは言わないが）十分具えていたことはすでに見て来た通りであろう。

(9)

愛しているならば連邦側将校とでも結婚すると述べた彼女ではあるが、果してその通りになったかどうかは彼女の日記の記すところではない。すっかり疎らになった彼女の日記の最後の日付は一八六五年五月二日と六月一五日である。前者の日付では、彼女は次のように書いている。

……先週の土曜日、四月二九日には七五〇人の釈放されたルイジアナ人がリー将軍の軍隊からここ〔ニュー・オーリーズ〕に連れて来られた――四年前希望と決意にあれほど溢れて出発した一〇連隊の唯一の生き残りであった。一八六一年四月二九日、〔兄の〕ジョージは自分の連隊を伴ってニュー・オーリンズを出発した。それから四周年目の日、彼らは戻って来た

が、ジョージと〔トマス〕ギブズの二人はずっと前に自分たちの墓に横たわっていたのである。……

そして、五月一五日にはただ一言、「私たちの南部同盟はずどんという音――リンカーンに向かって発射されたピストルの音、とともに消滅してしまった」と謎のように書いている。

サラ・モーガンの息子で彼の母の日記の最初の編集者であるウォリングトン・ドーソンの伝えるところによると、彼女が結婚した相手は、結局「連邦側将校」ではなく、南部の大義のために戦うべくやって来たフランシス・ウォリングトン・ドーソンという英国青年であった。南部再建時代にサウス・カロライナで結婚した二人は、ジャーナリズムによる健全な攻撃を通して、戦争のために南部が失ったものを取り戻そうと協力しあって働いた。その間、彼女にとって出産は背骨に受けた傷のためにとりわけ苦痛であったにもかかわらず、二人の子供に恵れた。しかし、それもつかの間で彼女は夫に先立たれる運命を迎えた（としか、息子は書いていないが、夫の死因は皮肉なことにこれまた決闘によるものであったらしい）。晩年の彼女は大使館員となった息子とともに、子供の頃からなじんできたフランス文化の現場パリで過ごし、そこでフランス語で小説を書いたりもした。彼女の永眠の地となったのもパリであった。一九〇九年五月一日、享年六七歳のことで、寒い雨降りに無理な訪問をして起こした肺炎が命取りとなったという。

彼女の日記は、先に述べたように、まず一九一三年息子によって出版された。その後一九六〇年、ジェイムズ・I・ロバートソン・ジュニア編注による新版が「南北戦争百周年叢書」の一冊としてインディアナ大学出版局から刊行された。

註

① Sarah Morgan Dawson, *A Confederate Girl's Diary*, Edited with a Foreword and Notes by James I. Robertson, Jr. (Indiana University Press, 1960), p. 32. 以下、同書からの引用の註は日記の日付を付することによって省略する。傍点は原文ではイタリックス。以下同様。

② Edmund Wilson, *Patriotic Gore: Studies in the Literature of the American Civil War* (Oxford University Press, 1962), p. 263.

③ Sarah Morgan Dawson, *Op. Cit.*, pp. xiv-v.

④ John Q. Anderson ed., *Brokenburn: the Journal of Kate Stone* (Louisiana University Press, 1955), p. 333.